



Title	物語における「他者」～『ワンダフル・ライフ』における架橋と断絶～
Author(s)	久保田, 健一郎
Citation	大阪大学教育学年報. 2002, 7, p. 19-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9138
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

物語における「他者」

～『ワンダフル・ライフ』における架橋と断絶～

久保田健一郎

はじめに

周知のように、ここ数年、教育学において「他者」というテーマが繰り返し論じられている。しかし、立ち止まって考えてみれば、何故、現在において「他者」が論じられるのだろうか、あるいは、これまでは「他者」について議論されてこなかったのだろうかという疑問が生じるだろう。教育の失敗や障害、世代関係、「大人-子ども」関係、「教える-学ぶ」関係の断絶、人間の成長の中での暴力、性、死など、「他者」という言葉で表象されている問題は、近代教育学においてすでに重要なテーマであったことは確かだろう。故に、「他者」はすでに近代教育学の枠内で論じられていたと思われる。しかし、筆者としては、近代教育学の「他者」に対する態度は、「他者」の「他者」性を喪失していたのではないかという疑念が拭いえない。そのような「他者」への関心に対する反省が、近代教育学が見直されている今日において再び「他者」が語られている理由ではないだろうか。

本研究は、このような問題意識をもとに、教育学において今再び「他者」を論じるためには、いかなる態度が求められるかということ考察する。そのために本研究は、まず、近代教育学の「他者」への関心を反省し、「他者」に対する新たな態度を模索する。そして、そのような態度を具体的な場面において考察するために1998年の日本映画『ワンダフル・ライフ』を取り上げ、人生を物語ることから「他者」性について論じていく。

第一章 今再び「他者」を語るために

第一節 近代教育学における「他者」

現在、教育学において話題になっている「他者」とは、ポスト・モダンの思想的潮流に乗った目新しい概念のように思えるかもしれない。しかし、実際はその出自は極めて古典的なものと考えられる。周知のように、「他者」とは西洋哲学の根底に位置する同一性との関係概念として浮き彫りになるものである。よって、決して実体として現れることはなく、同一性を逃れるものとして関係的に現れるのみである。ということは、「他者」の発祥を考えるならば、古代ギリシャにおける同一性の発祥にまで遡らなければならぬだろう。同一性が論じられるときには、そこから逃れるものとしての「他者」が同時に論じられているのであり、故に「他者」への関心は何ら目新しいものではないということがわかる。

このように「他者」を同一性との関係概念と考えれば、近代教育学はソクラテス以来の同一性の哲学の末裔であるカントに端を発するのであるから、すでに「他者」に関心が寄せられていたとしても不思議ではない。例えば、1999年の“*Zeitschrift für Pädagogik*”の第45号第2巻において「教育問題としての他者」という特集が組まれているが、その巻頭論文を飾るベンナーは「教育学では、ずっと以前から理論的実践的観点において他者について論じ、他者と取り組むことが不可欠とされ、実際に非常に多様な方法で考察されてきた」(傍点筆者)(Benner 1999b S.315.)と述べ、あたかも最先端の研究であるかのような「他者」への関心は、近代教育学の古典においてすでに存在し、その遺産を受け継ぎ発展させることが重要だとしている。

そのベンナーとは、80年代においてポスト・モダンに対して厳しい批判を突きつけた人物である。当時のベンナーは、ゲステマイヤーとの共論文において、啓蒙を起源とする近代教育学がアポリアに直面したとするが、彼らはそれを「啓蒙の弁証法」を乗り越える根拠としてしまう(Benner/Göstemeyer 1987 S.65.)。つまり、ベンナーらは近代教育学の問題設定から生じるアポリア、すなわち、近代教育学の同一性を脅かす「他者」を描き出しはいるが、本来なら自らの地盤を揺るがすはずのその「他者」を、「啓蒙の弁証法」を回避するものとして肯定的に評価してしまうのである。ということは、近代教育学は自らを脅かす

はずの「他者」を、自らを支えるものとしてしまう、すなわち、自らにとって意味あるものとして飼いつけられてしまうと云えるのではないか。

ベンナーのこのような「他者」に対する態度は、1999年の「他者」特集においては古典擁護の形で現れている。ベンナーは、近代教育学の関心は「教育的相互作用に自ら参加する主体の個人的な他者性」(Benner 1999b S.316.)と「事、教材、もの、あるいは、世界」(Ebd.)の「他者」性に分かれるとする¹。そして、人と物との両者の関係において、主体の同一性から逃れる「他者」性が現れるとしている。また、「他者性について人的な側面のみを考慮に入れるか、あるいは、物質関係的、即物的側面のみを把握するようなアプローチは、概して理論的、実践的教育問題の複雑さを度外視している」(Ebd.)と述べ、両者を統合した考察の必要を説いている。その統合の成功例として、ルソー、フィヒテ、フンボルトをあげるが、その中でもとりわけルソーについての論述は注目に値する。

ベンナーによれば、ルソーはまず自然、物、人間による教育を区別し、それぞれを「他者」性と関連させた。特に、ルソーは「私たちが全く自らの自然について無知であるということによって、人間の自然の他者性の概念を基礎づけた」(Ebd. S.318.)と述べ、ルソーの思想の根本概念である自然がまさしく「他者」性を特徴としていたとする。そして、「ルソーに言わせれば、子ども時代は私たちに全く未知のものである」(Ebd.)と述べた上で、「子ども時代の非規定性を解明することと、それを規定性へと変換してしまうことだけでなく、そのような解明から生じる規定性を、常に改めて非規定性として再解釈することも重要である」(Ebd. S.318-319.)とする。ここからベンナーは、すでに規定された自然を否定することによって、より一層厳密な規定に達するような弁証法的な「他者」規定を目論んでいることがわかる。なるほど、ベンナーは「人間の未知の規定 (die unbekante Bestimmung) は、初めにあるだけでなく、教育と研究の終わりにもある」(Ebd. S.319.)とも述べている。しかし、この「未知の規定」という不自然に聞こえる言葉は、結局のところルソーの自然概念が教育研究によって漸進的・事後的に規定されていくことを示していると思われる。しかも、ベンナーにおいては、その規定された自然が後の教育の根拠となる事前の規定へととても簡単に転化してしまうのである。それは以下の言葉に顕著に現れている。「規定されない自然の法則を、ルソーは新しく把握された〈可能性 (perfectibilité)〉の概念で説明する。…人間の完成可能性 (Perfektibilität)、あるいは、教育可能性 (Bildsamkeit) は教育によって生み出されるものとしても、学習によって作り出されるものとしても考えることはできない。それは、私たちが教育、形成、学習と呼ぶものにとって対象構成的性格を持つのである」(Ebd. S.320.)。このようにベンナーは、ルソーが自然の「他者」性を教育可能性を根拠として、それは対象構成的性格を持つとする。また、このような自然の「他者」性に基づく構成的な教育可能性を補強する論拠として、すでに述べたような人的「他者」と物的「他者」の分離不可能性をあげている。「ここで素描した自然による教育、人間による教育、物による教育の間の関係は、ルソーが物による教育と人間による教育を二者択一としているのではなく、互いに関連する構想として思索していたということを明らかに示している」(Ebd.)。そして、「他者性は、教育過程においてさらにもちろん三重の観点で関わっている。一つは、成長しつつある者の非規定性として、さらに、成長しつつある者に対峙する教育者の他者性として、そして最後に成長しつつある者と教育者に対峙する世界の他者性としてである」(Ebd. S.321.)とルソーの思想をまとめている²。こうした三重の性格から、教育可能性は対象構成的性格を持つということなのである。

このベンナーの「他者」への言及は、近代教育学の「他者」への関心を集約しているように思える。また、「自然」の事後性や教育可能性の構成的性格など、近代教育学批判の文脈を取り入れた上での綿密な古典擁護であるが故に、本論文との立場の違いがより明瞭に現れるであろう。その立場の違いを一言で言えば、「他者」性を教育可能性の根拠としてしまう点である。この点は、80年代におけるポスト・モダン批判から一貫していると言えよう。このように、自らの文脈を脅かすはずの「他者」を、いとも簡単に自らの可能性の根拠としてしまう点こそが、近代教育学の「他者」に対する態度の特徴ではないだろうか。しかし、そのように教育可能性へと変換させられてしまうような「他者」は、果たして「他者」と言えるだろうか。教育学にとっての「他者」とは、教育学の同一性を脅かすからこそ「他者」なのではないだろうか。教育可能性として意味づけられて教育学の文脈を強化してしまうような「他者」は、すでに「他者」性を喪失していることは明らかであろう。よって「他者」に対する新たな態度を模索する本研究は、

「他者」を規定することのみならず、「他者」に同一性の側から期待を投げかけることも許されないのである。そのような「他者」への主体的な態度を捨て去ることによって、「他者」を「他者」のままに受け止める態度が可能になるのではないか。

第二節 新たなる態度の模索

本節では、前節における近代教育学の反省をもとに、「他者」に対する新たなる態度を模索していく。この新たなる態度の鍵は、前節の考察で示唆したように、「他者」に対する受動性であると考えられる。この点に関連して、ハイデガーの思想が参考になると考えられる。

周知のように、ハイデガーは古代以来の「存在」への問いの反復を試みる中で、ソクラテス以降の哲学を解体することになる(Heidegger 1977 S.31.)。ハイデガーによれば、ソクラテス以降の哲学は、同一性を与えるという人間の主体的な力によって存在者を「存在」させることとまとめられる。ということは、その哲学にとって同一性に適わないものは「存在」しないことになり、同一性から逃れる「他者」は忌み嫌われ、「他者」はその「他者」性の克服が要求される。よって、そこでは「他者」性を喪失した「他者」しか論ずることはできず、そのような「他者」はすでに「他者」ではないことは明らかであろう。ハイデガーは、このような「他者」性の喪失への批判を、決して「他者」という言葉を使うことなく展開していく。それはあたかも、人間が言葉を与えることによって「他者」が同一性を手にして存在者として表象され、その「他者」性を喪失してしまうことを回避しているかのようである。こうして、ハイデガーは、ソクラテス以降の哲学との対決姿勢を明確にして、人間の主体的な力に頼らない「ソクラテス以前の哲学」に理想的な思索のあり方を求めていくのである(Heidegger 1983、あるいは、Heidegger 1996)。

自らの思索を徹底した受動性へと転回していったハイデガーは、人間は「存在」の家である言語の番人に過ぎず、「存在」の呼び声に従うことしかできないと述べるまでに至った(Heidegger 1976 S.313.)。では、本論文も「存在」の声に耳を傾けることに沈潜すればいいのか。いや、教育学の領域に位置する本論文は、「存在」を関心としながらも、あくまでも表象された存在者から出発しなければならないだろう。つまり、表象される存在者を論じながら「存在」の声に耳を傾けなければならないということである。これは一見不可能な試みに思えるかもしれないが、教育学の領域で今再び「他者」を論じること自体が、すでにこうした試みを行っていることなのではないか。それは逆に言えば、教育学においては、「存在」の次元においてのみ思索可能であるはずの「他者」が存在者として表象されてしまうという悲劇性につながるのではないだろうか³。このような悲劇性の自覚から出発すれば、教育学の領域では同一性から逃れる「他者」を論じることにはできないという見解は、その悲劇性への想像力が欠如していると言えるのではないか。しかし、この悲劇性を盾に開き直って、同一性へと切りつめられ、「他者」性を喪失した「他者」を意味づけることで満足してもいけない。重要なことは、「他者」が表象されてしまう悲劇性を引き受けると同時に、そこに安易な意味づけを行わず、表象され「他者」性を喪失したはずの「他者」に「他者」性の痕跡を認識することではないだろうか。

第二章 架橋と断絶の物語論 ～『ワンダフル・ライフ』について～

第一節 『ワンダフル・ライフ』について

前章の考察において、教育学において今再び「他者」を論じるためにはいかなる態度が求められるかという問いに対して、まずは、「他者」に意味づけをせずに「他者」のまま受け止める受動性が求められるということ、次に、存在者として表象され得ぬはずの「他者」が表象されてしまうという悲劇性を引き受けること、そして、表象され「他者」性を喪失したはずの「他者」に「他者」性の痕跡を認識することが重要であることがわかった。

このような「他者」に対する新たなる態度を具体的場面において考察するために、本章では1998年の日本映画『ワンダフル・ライフ』を取り上げる⁴。この映画では、登場人物のそれぞれの人生の物語の間の架橋と断絶、そして、物語を逃れる「他者」への暖かいまなざしが、過剰な甘さに流されずに静謐な筆致

で描かれている。以下にストーリーを記す。

人は死を迎えた後、生と死の境界にある古びた建物に招かれる。そこでは一週間の時間が与えられ、人生において最も印象に残った場面を選択し、その記憶が最も鮮明に蘇った瞬間にあの世に旅立つことになる。

望月（ARATA）、しおり（小田エリカ）らは、生と死の境界にあるその建物で、死を迎えた人々の記憶の選択の手助けをして日々を過ごしている。彼らの前には様々な人が現れ、次々と自分の人生を語っていく。

ある日、渡辺という老人（内藤武敏）が彼らの前に現れるが、なかなか思い出を選ぶことができない。よって、担当の望月は、渡辺に彼の人生を記録したビデオを手渡す。そして、渡辺の新婚生活が画面に映されたとき、望月の態度に変化が見える。その些細な変化を、望月に思いを寄せるしおりが気づかないはずはない。望月は上司（谷啓）に担当を変えて欲しいと申し出る。

ある時、望月は渡辺に、自分たちが同世代であること、自分が20才の時に戦死したこと、そして、50年以上に渡って生と死の境界でこの仕事を続けていることを告げる。しかし、望月は告げられなかった。渡辺の妻が自分の婚約者であったことを…

生と死の境界で働く人々は、記憶の選択ができなかった人たちである。川嶋（寺島進）は、幼い娘を残して死んでしまったが故に、生と死の境界にとどまり、娘が二十歳になるまで成長する姿を見届けたいという。彼らは、自分の人生を完結できなかったが故に、生と死の境界で浮遊し続けているのだった。

渡辺は迷ったあげく、年老いたある日、妻と公園のベンチで語らう場面を選ぶ。彼らは結婚後、年老いたその日にはじめて映画を観に行ったという。公園のベンチでこれからも映画を観に行くことを約束したが、その後しばらくして妻は死を迎えたのである。

渡辺が、妻との記憶とともにあの世に去った後、望月への置き手紙が残されていた。そこには、望月が妻の婚約者であると気づいていたこと、すでにこの世にいない妻の婚約者に対して嫉妬の気持ちがあったことなどが書き残されていた。そして、自分が妻の婚約者だったことを告げなかった望月の優しさへの感謝の気持ちも記されていた。

その手紙を読んだ望月の心は乱れた。望月が告げなかったのは、渡辺への優しさではなく、自分が傷つくことが怖かったからだった。そして、自分が誰とも深く関わり合ったことがないので人生を肯定できないことをしおりに話した。そして、しおりは「自分の知らないところで誰かと深く関わっていたかもしれないじゃない」と望月に言う。

望月は、しおりに促され、渡辺の妻がどんな記憶を選んだかを調べる。すると、彼女の選んだ記憶は、渡辺が選んだ公園のベンチと同じ場面だった。しかし、日付が全く違う。妻が選んだのは、渡辺の選んだ日より50年も前の記憶だった。望月としおりは、渡辺の妻の人生を映したビデオを探して、彼女の選んだ記憶がどの場面かを調べる。すると、その場面は、公園のベンチで望月が自らの出兵を彼女に告げた日のことだった。

自分が人の幸せに参加していることに気づいた望月は、その場面を選んで自分の人生を完結させることを決める。仕事仲間と共に、スタジオで映像化する。そして、ホールでその映像がスクリーンに映し出される。映像が終わり、ホールに灯りがともされたとき、望月の姿はすでにそこにはなかった…。

このように簡潔に描いてしまうと、望月と渡辺と渡辺の妻の物語が中心になっているように思えるかもしれない。しかし、実際は死を迎えた人それぞれの物語が並行して語られていくのである。それら複数の物語は永遠の平行線を辿るかのようである。望月たちの物語は決して全体を統括するものではなく、複数の物語のうちの一つに過ぎない。映画の前半では、カメラの前に次々と人が現れ自分の人生を語っていく。出演者の中にはプロの俳優（伊勢谷友介、由利徹、内藤武敏ら）もいれば、素人もいる。プロの俳優には

台本を渡された人とそうでない人がいるが、素人は全て即興である。彼らが語る人生を、生と死の境界に働く人々を演ずるプロの俳優（ARATA、小田エリカ、内藤剛志ら）が即興で受け応えをする。

このような斬新な手法は、ある特定の物語が全体を統括すること、そして、台本によって物語が固定化されることを徹底して回避しているかのようだ。その一方で、他者（他の人）との物語の架橋や、物語ることで人生を肯定することの重要性が描かれているようにも見える。これらの点を次節では、岡真理の解釈を検討することで論じていきたい。

第二節 岡真理が観る『ワンダフル・ライフ』

岡真理は、教育学者ではないが、教育学における「他者」論議には欠かせない人物であるようだ⁵。その理由は、「他者」が存在者として表象されてしまう民族問題を論じている点で、教育学と重なる点が多いからであろう。その岡が『ワンダフル・ライフ』について論じているということから、この映画がそのような悲劇的な議論に耐えうるテキストであると考えられるだろう。では、岡の解釈を肯定面と否定面に分けてまとめてみよう。

岡は肯定面として、二点をあげている。一つは、他者（他の人）との関係の重要性である。望月は婚約者の幸せに参加していたことを知って自分の人生を肯定できたわけだが、この点に関して岡は以下のように述べている。「生き残った婚約者が自分に対して限りない情愛を感じたその瞬間を彼女の人生でもっとも幸せな瞬間として記憶に刻んでいたということを知ったとき、自分ひとりのなかでは決して意味を見いだせなかった自分の生が、他者のなかで、その生に大きな意味を持っていたことを知り、肯定できたということなのだろう。人が生きることの意味は、自分ひとりのなかでは決して生まれない。人と人が交わって生きるということ、人と人との関係性のなかにおいてはじめて、生まれるということであろうか」（岡 2000 63-64頁）。

二つ目は、他者の「他者」性が描かれている点である。岡は、その点をプロの俳優の洗練された演技ではなく、素人の語りに見いだす。岡は以下のように述べている。「自分にとってリアルな出来事が言葉で説明されるとき、果たして他者にもリアルなものとして伝わっているのだろうか、自分の言葉は、出来事のリアリティを相手に伝えているのだろうか、自分の言葉は出来事を十分、語っているのだろうか、そのような根本的な不安を抱えているがゆえに、彼らの話は、たえず相手に確認を求めながら語られてゆくのである。自分がその出来事の記憶に不安を抱いているからではない。自分にとってはどんなに確信に満ちた記憶であっても、それを他者に語るということから、不安が生まれるのである」（同上 64-65頁）。そして、岡は素人の語りを受け止めるプロの俳優の、台詞を語るときには見いだせない「無防備さ」に注目し、「記憶を語るという営為は、語り手が主で、聞き手が従であるというような関係でなされるのではなく、語り手と聞き手が、共同で作り上げていくものなのだと、それを見てわたしは思った」（同上 65頁）と述べている。

否定面としては、語られた記憶をもとに再現ビデオがつくられる点について、「再現しうるのは、語られうるものだという認識がそこにはあるが、そのことは逆に言えば、語り得ないものは再現し得ない、ということでもある」（同上 68頁）と批判する。岡は、語っているうちに辻褄の合わなくなった女性の再現ビデオの映像を流さないことを指摘し、「言葉では説明できないことは再現できない、ということ、作品ははからずも告白してしまった、ということなのだろうか」（同上）と述べ、この映画の限界を指摘する。そして、岡は「《出来事》の分有、記憶の分有をテーマとするこの作品が問題にするのは、言葉で語りうるような出来事の記憶であって、語り得ない《出来事》の記憶という問題は排除されている」（同上 69頁）と批判するが、それは出演者が全員日本人という共通の言語を持つ人で構成され、言語的「他者」が描かれていないという批判にもつながる。「出来事の記憶が言葉で語られうると素朴に想定するとき、私たちは、〈言語〉のこの物質性に躓くことのない者たち、言語というものがあたかも透明なものであるかのように振る舞える者たちの存在を自明なものとしていることになる。言いかえれば、〈言語〉で躓かざるを得ない者たちが、私たちの社会に存在するという事実を忘れてる」（同上）。

以上が、岡が観た『ワンダフル・ライフ』であるが、肯定面として、他者との関係性が生を意味づける

点、語りの不安によって他者の「他者」性が描かれている点が賞賛され、否定面として、広い意味での言語的「他者」が描かれていない点が批判される。これらを岡が提出した論点として、次節からは筆者の意見を述べていこう。

第三節 物語の架橋、そして、断絶

前節でまとめた岡の肯定面のうち、他者の「他者」性に関しては納得できるが、もう一つの点は疑問である。本節では、その他者との関係性が生を意味づけるという点について考察する。岡は、望月と渡辺の妻との物語の架橋にのみ注目しているが故に、この映画を他者との関係の重要性を啓蒙するものと解釈してしまったのではないか。しかし、筆者は二人の架橋の背後に見える、渡辺と妻との断絶を看過できないのである。

では、永遠の平行線を辿るはずの複数の物語は、いかにして架橋されるのだろうか。岡は望月の側から物語の架橋を見ているが、ここでは渡辺の妻の側から見てみよう。渡辺の妻は、記憶を選ぶ際に、望月が同じ記憶を選択していたことを願ったかもしれないが、望月が選んだかどうかかわからないまま選んだことは確かである。つまり、記憶の選択の際に、物語の架橋は前提とされていなかったのである。渡辺の妻と望月の物語は架橋されたわけだが、彼女の側からみればその架橋はあくまでも結果である。

一方で、望月は事前に架橋を想定して記憶の選択をしたわけだが、それは50年以上も生と死の境界を漂うという奇妙な設定において可能になったことである。ということは、物語の架橋とは事後的であり決して事前に想定できるものではないことがわかる。ある人が自分の人生に別れを告げるときにその人生を肯定できたとしても、何故に肯定できたのか、肯定できた理由に誰が参加しているのかということは、他の人には決してわかりえない。私たちができることは、その人が人生を肯定できた場面に自分が参加していることを願うこと、そして、自分が死を迎えたときその人との場面を選ぶことだけではないか。つまり、架橋はあくまでも結果として事後的に現れるものであり、事前に想定することはできないのだ。ということは、渡辺も渡辺の妻も、目の前に何も立てることはなく、ただ単に記憶を選択した、つまり、他者の「他者」性を引き受けたのである。その結果として二人の物語は断絶したのである。一方で、望月は、目の前に架橋を立たせて記憶を選択した、つまり、「他者」はすでに意味づけられていたのである。当然、物語は架橋されるが、その架橋とはどれほどのことだろうか。

ただ、岡の解釈から抜け落ちていた場面を視野に入れると、より複雑な解釈が可能になる。この映画では、再現ビデオの撮影において、場面を正確に再現するためにそこに居合わせた人の役を生と死の境界で働く人々が演じる設定になっている。しかし、望月の再現ビデオでは、渡辺の妻の役をする人はなく、彼はベンチで一人座っていた。また、望月が画面から消える瞬間、生と死の境界で働く仲間との映像が一刹那差し挟まれる。カメラの位置が逆転し、望月がビデオを撮影している仲間を見ている映像に切り替わるのである。この映像を視野に入れると、望月は渡辺の妻との記憶を選択したのではなく生と死の境界で働く仲間との記憶の選択したのではないか、という解釈も可能である。もちろん、彼らが望月との記憶を選択するかどうかかわからないし、それどころか彼らは望月が渡辺の妻との記憶を選択したと思っている可能性が強い。それでも、望月は、彼らとの記憶を選択したのだ。

この世界には無数の物語が併存する。それらを統括するかに見えるメタ物語でさえ、複数の物語のうち一つでしかないことは、最近のニュースを見れば明らかであろう。複数の物語は、永遠の平行線を辿るかのようである。その平行線がどこかで交錯すること、すなわち、複数の物語が架橋されることを願う気持ちはわからなくもない。しかし、その架橋は、無情にも人間には手の届かないところのみ生じるのであろう。人間の力による架橋は暴力と化し、より一層強固な断絶を生み出すだろう。私たちは常に断絶を目の当たりにすると同時に、振り返ることによって架橋を認識する。望月は、振り返ることによって認識した架橋を目の前に立てようとしたが、そのような架橋の暴力性に気づいたのではないか。であるからこそ、望月は目の前に何も立てないまま、仲間との記憶の選択を行ったのではないか⁶。

第四節 語りえぬ物語 ～言語の「他者」はいかに描かれるか～

本節では、岡の解釈した否定面について考察する。岡の否定面とは、この映画では「語りえぬ物語」が描かれていないということ、すなわち、言語の「他者」が排除されているということである。その根拠を、語りの辻褄が合わなくなった女性の再現ビデオが流されなかったことや、出演者全員が日本人であったことに求めている。しかし、別の場面から解釈すると、必ずしもそうとは言えないことがわかる。

俳優の伊勢谷友介は、台本を渡されずに「伊勢谷友介」本人としてこの映画に出演していた。もちろん、伊勢谷は死者としてアドリブで自分の物語を語るための役だった。しかし、実際に伊勢谷が語ったのは、自分の物語ではなく、自分の物語を語らない理由だった。記憶の選択を拒絶する伊勢谷の語りに同一性への抵抗を読みとめることは容易である。また、伊勢谷の即興は、台本をも書き換えさせることになり、伊勢谷が記憶の選択を拒絶し、望月の後任として生と死の境界で働くという後日談が付け加えられることとなったのである。

また、記憶の選択に躊躇していた渡辺と伊勢谷とのやりとりは注目に値する。記憶の選択の期限を迎え、再現ビデオの撮影の日の朝、ドライバーの使いすぎで電気が使えなくなる。そのことについて、伊勢谷は「ビデオを撮影するからといって、衰えた容姿を整えようとするのはいかがなものか」と批判する。この発言は単に老人たちを嘲笑しているようにも聞こえるが、彼の物語ることへの拒絶と関連させれば、人為的につくられた姿への抵抗と考えられるだろう。彼にとっては、自分を物語ることも、記憶の選択をすることも、衰えた容姿を整えることも、ありのままの自分を欺くことでしかないようだ。つまり、伊勢谷は、自らの人生を物語ることによって、その制作された自分の同一性から逃れる「他者」を排除することが許せなかったのではないか。つまり、物語ることによって制作された自分は、作りものの自分としか思えなかったのではないか。物語ることによって自分を中心化することは彼にとって許されず、語らないという選択をすることによって、自らの脱中心化を試みているのではないだろうか

では、「語りえぬ物語」を描くということはどういうことだろうか。それは辻褄の合わない語りを映像化して辻褄を合わせるという程度のことではないだろう。辻褄の合わない語りを、すなわち、言語の「他者」をありのまま受け止めることではないだろうか。辻褄の合わなくなったズレをズレのまま受け止めること、すなわち、「他者」を「他者」のまま受け止める受動性が求められるのであって、岡の言うように映像化することによってズレを解消し映像の同一性に回収することではないだろう。語りの辻褄が合わずに戸惑う女性の姿を映すことこそが、「語りえぬ物語」を描くことにつながるのではないか。女性は戸惑うことによって、脱中心化する語りを可能とし、言語の「他者」を表象するのだ*7。ここまで繊細に言語の「他者」が描かれているのだから、外国人の語りの映像がなくとも彼らにまで配慮の射程が伸びていると考えられよう。

語ることは同一性の根底に位置するが、それは同時にその「他者」をも生み出す。語りの辻褄の合わなくなった女性の戸惑う姿も、語るときの他者の「他者」性への不安も、複数の物語が描く永遠の平行線も、語ることによって生み出される「他者」であろう。このように、この映画における物語は同一性のみを産出しているかに見えて、同時に絶え間なく同一性からのズレも産出しているのである。そのズレは「他者」であり決して表象できないはずのものにもかかわらず、物語る場面において表象されてしまうのだ。しかし、この映画の優れたところは、物語ることによって「他者」が表象されてしまうにもかかわらず、その表象された「他者」を秩序化したり意味づけしたりしないことによって、その「他者」性の痕跡を浮き彫りにする点であろう。そのような意味づけの拒絶は、岡の指摘した聞き手の無防備さにおいて顕著に現れているだろう。洗練されているはずのプロの俳優たちは、自分の物語が理解されるだろうかという素人の語り手の不安を受け止められず、曖昧な返事に終始している。この語り手と聞き手の関係は、語り手の言葉を聞き手が理解することを目的としたものではなく、架橋へと向かうことはない徹底した断絶と、その断絶の背後で事後的にのみ認識しうる架橋とが、その矛盾を解消しないまま併存するような関係であろう。ここでは、断絶は架橋の側から何らかの可能性として意味づけることはできず、架橋から見ればまさしく「他者」なのである。そして、その「他者」を「他者」のまま受け止めることを強いられるのである。このような架橋も断絶もともに肯定を強いられるような語りの関係こそが、「他者」を「他者」のまま受け止める受動性を可能にするのではないか。

おわりに

本論文は、教育学において今再び「他者」を語るためにはいかなる態度が求められるかという問いにおいて始まり、物語ることに於いて生み出される「他者」性を論じることで、その問いに対して何らかの解答を与えることを試みた。その結果として、物語ることは、必ずしも語り手が同一性に基づいて自らを語り尽くすことや、語り手と聞き手の架橋のみが肯定されるのではなく、言語の同一性から逃れる「他者」性や、語り手と聞き手との断絶も同時に現れ、そして、それらも肯定されるべきものであることが分かった。こうして、物語ることに於いては「他者」は表象されるが、その「他者」に同一性の側から意味づけすることは許されない。それは、近代教育学の「他者」への関心とは対照的であろう。よって、このような物語論は、現代の教育学における「他者」論議にとって大きな意味を持つのではない。

このように、本論文における物語論は教育学の文脈から現れたわけだが、物語論の射程は教育という限定された領域にとどまらず、医療、看護、心理などの様々な臨床関係に伸びているであろう。それらの臨床場面は、「他者」が表象されてしまう悲劇的な場面であり、故に「他者」性を喪失したはずの「他者」の痕跡を認識することによって豊かな実践が可能となるという点で共通しているのではないだろうか。そして、それらの場面において「他者」への受動的な態度の重要さは計り知れないものと考えられ、今後より一層深められる必要があるだろう。

<注>

- *1 物に焦点を当てた研究としては、同じく「他者」特集におけるマイヤードラウベの試みがあげられる。彼女は「物の挑戦的性格」に注目し、物の「他者」性によって主体が揺さぶられ、脱中心化していく形成過程を現象学的知見を駆使して描いている。(Meyer-Drawe 1999)。また、その論に対し、ヴェンシェは物と言語の分離の問題を軸に反論している (Wünsche 1999)。
- *2 ベンナーのより詳しいルソー解釈は以下の論文が参考になる。(Benner 1998)
- *3 この点に関して、田中智志は「すべての他者は完全な他者であると了解することは不可能であるという了解、つまり、他者了解がアポリアである了解」(田中 2000 69頁)を求める。その理由は、「他者をく完全な他者>と知るためには、他者を知ってはならないからである。他者を知ることは、他者を私の視界の一現象に還元し、私の言説に内属する経験的な対象に還元し、理解不可能性を可能性にすり替えることである」(同上 69-70頁)。そして、人は「<完全な他者>を単なる他者に還元しなければ、普通に生活することができない」(同上 70頁)と述べ、「問題は、他者性を看過したり、<完全な他者>を経験的な他者に還元しなければならぬという私たちの現実ではない。この現実を了解しないことである。…すなわち、私たちは<完全な他者>を経験的な他者に還元し、個性性を回復可能性に還元せざるを得ないこと。…こうした私たちの生の悲劇性(ないし喜劇性)を了解することである」(同上 70-71頁)としている。
- *4 監督は『幻の光』『ディスタンス』の是枝裕和。また、この映画は豊中看護学校三年生の哲学の授業で使用したものである。その際の学生の感想には大きな示唆を受けた。
- *5 例えば、教育思想史学会第11回大会の丸山恭司の発表「教育という悲劇、教育における他者—教育のコロニアリズムを越えて—」、あるいは、教育哲学会第44回大会の高橋舞の発表「他者とく出逢う」地平 ~言語の超越性あるいは超越的言語に関しての一考察~」において引用されている。
- *6 ハイデガーは、ドイツ語で「表象する」を意味するvorstellenを、「vor=前に」「stellen=立たせる」と分解して考えることによって、ヨーロッパの思索の本質に「目の前に立たせる」という働きがあることを示している(Heidegger 1962)。本節で使用した「目の前に立たせる」という言葉は、このようなハイデガーの言語学的探求を念頭に置いたものである。その反対の意味で使った「目の前に何も立てないままに」という言葉も、以上の意味を含めたものである。「立てる」作用そのものを批判するとしたら、ただ単に記憶を選択した際にはその言葉を挟まない方が適切かもしれないが、本論文が近代哲学・近代教育学を問い直しているという痕跡を残すために、あえてこのような表現を選択した。
- *7 このような語りの例として、ベンヤミンの『ベルリンの幼年時代』があげられるだろう(ベンヤミン 1971)。ゲバウアーとヴルフは、この作品を主体が存在者を編集するような従来の自伝に抵抗して、主体に回収されない断片がミメーシス経験によって描かれていると高く評価している(Gebauer/Wulf 1992)。

<参考文献>

- Benner,D./Göstemeyer,K-F.: 1987, "Postmoderne Pädagogik:Analyse oder Affirmation eines gesellschaftlichen Wandels?", *Zeitschrift für Pädagogik*, Jg.33, S.61-82.
- Benner,D.: 1999a, "Der Begriff moderner Kindheit und Erziehung bei Rousseau, im Philanthropismus und in der deutschen Klassik", *Zeitschrift für Pädagogik*, Jg.45, S.1-18.
- Benner,D.: 1999b, "Der Andere" und "Das Andere" als Problem und Aufgabe von Erziehung und Bildung", *Zeitschrift für Pädagogik*, Jg.45, S.315-327.
- W・ベンヤミン 小寺昭次郎訳 1971 『ベルリンの幼年時代』 晶文社。
- Gebauer,G./Wulf,C.: 1992, Mimesis Kultur-Kunst-Gesellschaft.
- Heidegger,M.: 1962, Die Technik und die Kehre.
- Heidegger,M.: 1976, Über den <Humanismus>, In Martin Heidegger Gesamtausgabe Band9: Wegmarken S.313-364.
- Heidegger,M.: 1977, Sein und Zeit, In: Martin Heidegger Gesamtausgabe Band2.
- Heidegger,M.: 1983, Einführung in die Metaphysik, In: Martin Heidegger Gesamtausgabe Band40.
- Heidegger,M.: 1996, Nietzsche, In: Martin Heidegger Gesamtausgabe Band6.
- Meyer-Drawe,K.: 1999, "Herausforderung durch die Dinge. Das Andere im Bildungsprozess", *Zeitschrift für Pädagogik*, Jg.45, S.329-336.
- 岡真理 2000 『記憶／物語』 岩波書店。
- 田中智志 2000 「ポストモダニズムの教育理論 一他者性・冗長性・悲劇性一」(『現代教育学の地平 ポストモダニズムを越えて』所収 南窓社) 53-77頁。
- Wünsche,K.: 1999, "Der Herausforderungscharakter der Dinge", *Zeitschrift für Pädagogik*, Jg.45,S.337-342.

"Others" in a Narrative

~A Bridging and Rupture in "Wonderful Life"~

KUBOTA Kenichiro

In recent pedagogy, as is known, "others" have been focused more and more. But why now? Not before? Of course, various problems, such as failure of education, generation gap and violence or death during the developmental lifetime, that could be represented as "others" had been already argued. It seems to me, however, that an attitude toward "others" in modern pedagogy loses "otherness" of "others". Reflective thinking on the attitude could contribute to the reappearing of the "others" in the process of reconsidering modern pedagogy.

This paper tries to catch a new attitude toward "others" from concrete scenes. The author takes up a Japanese movie "Wonderful Life" and argues about "others" using narratives of life in the film. The author attaches importance to the passivism of accepting "others" just as "others", the tragedism in which "others" can be represented and the perception of the trace of "otherness" in representative "others".